

中国語は英語に似ているか



菊田正信

中国語はよく、英語に似ているといわれる。確かに、
我是学生。（私は学生です。）
という言い方は、

I am a student.

という言い方に似ている。“是”はbe動詞のようだ。

しかし、be動詞はam, are, is, …と変化するが、“是”はいつでもどこでも“是”である。a studentにしたところで、複数であればstudentsとなるが、“学生”は基本的には単複同形である。語順については似ている面もあるのだろう。この例は確かにSVCだ。

中国語は孤立語といわれるが、この際注意すべきは、漢字で表記されることから察しがつくように、中国語は印欧語のように語形変化をしないということである。語形変化をしないと、語と語との関係は語順によって示される傾向が強くなる。また、例えば日本語の助詞のような働きをする語があれば、それによって語と語との関係を示すことができるが、中国語では、それも非常に限定的である。というわけで、中国語の文法書をひもとくと、語順、そして語順を形にした文型についての記述が多いのに気がつく。

ところで、中国語の学校文法が形をととのえたのはそう古いことではない。1949年に中華人民共和国が成立したが、当時識字率は20%にも達していなかった。まずはこれを改善すべく識字運動が展開され、並行して文字改革が進められた。そして一方、全国に通用する共通語の規範化とその普及のためにさまざまな施策がとられた。学校文法の規範づくりはその重要な一環であった。活発な文法論争をへて56年に、暫定の学校文法体系なるものが示された。暫定としながらも、その後の中国における学校文法をしばり、日本で編まれ

る教科書等もこれに沿うことになってしまった。

この暫定案には、しかし、英文法の影が認められる。英語はもともと屈折語だが、語形変化が摩滅(?)して語順の機能が相対的に強くなったことばである。語順については、先んじていた英文法の考え方が参考になったのである。実際、中国語の教科書には英語の五文型に倣って、SV, SVO, SVOO等々の型がみえる。気になることは、英文法のSVを基本にする考え方がそのまま中国語の文法にも導入されたことだ。

例えば、よく使われる次のような文はどう扱うのか。

桌子上放着一个苹果。

“桌子上”は「机の上」，“一个苹果”は「一個のリンゴ」といったこと。“放”は「置く」という意の動詞だが、接辞の“着”を接尾して「置いてある」といった意味になる。“放(着)”と後置されている“一个苹果”との関係は、結論だけを言えばVS風になる。「机の上にリンゴがひとつ置いてある。」という文意である。

このようなVS風の文はSVを基本とする体系にはなじまない。暫定案ではこれをまま子扱いして、特殊な文だとして囲いこんでしまった。84年には暫定案を見直す案が出されたが、そこではあろうことかSV型だとしてしまっている。学校文法とはいえ、中国語の本質にふれる体系が示せなかったのは残念だ。

実は、英語の場合にも似た事情がある。例えば、

There is an apple on the table.

のような、thereを使った存在文などは、ふつうSV型とするが、これも気になるところだ。この辺にこそ、中国語と英語の最も似ているところがあるのかもしれない。

(きくた まさのぶ・一橋大学名誉教授)